

Title	歯科保健に対する成人の意識調査：東京都心部勤務者の場合
Author(s)	杉山，利子；高橋，江里子；青木，聡；市野，亮治；黒田，裕之；高瀬，保晶；野呂，明夫；細川，伊平；槇石，武美；平井，義人；石川，達也
Journal	歯科学報，93(5)：553-560
URL	http://hdl.handle.net/10130/2179
Right	

— 原 著 —

歯科保健に対する成人の意識調査*

— 東京都心部勤務者の場合 —

杉山利子 高橋江里子 青木 聡
 市野亮治 黒田裕之 高瀬保晶
 野呂明夫 細川伊平 榎石武美
 平井義人 石川達也

東京歯科大学歯科保存学第三講座
 (主任：石川達也教授)

(1993年2月1日受付)

(1993年2月9日受理)

Survey of Awareness of Dental Health Conditions
 — among of office workers in the Tokyo Metropolis —

Toshiko SUGIYAMA, Eriko TAKAHASHI, Satoshi AOKI, Ryoji ICHINO,
 Hiroyuki KURODA, Yasuaki TAKASE, Akio NORO, Ihei HOSOKAWA,
 Takemi MAKIISHI, Yoshito HIRAI and Tatsuya ISHIKAWA

The Third Department of Conservative Dentistry, Tokyo Dental College
 (Chief : Prof. Tatsuya Ishikawa)

緒 言

当教室では歯科保健対策の一環として、東京都衛生局からの依頼を受けて、2回にわたり成人歯科保健の実態調査をアンケート形式で実施した。第1回目は、平成元年に一般事業所(都内23区内の大、中、小企業5社)に勤務する成人(20代~60代)を対象に、患者の側から見た歯科的健康状態・歯科受療動向の調査を行った¹⁾。第2回目では、平成2年に前回とほぼ同形式で、実際に東京歯科大学水道橋病院、または特定の会社の社内診療所に現在通院中の成人(20代~60代)を対象にアンケート調査を実施し²⁾、調査後各担当医がコメントを記入することにより、回答者の思い違いや記入の誤りを修正してアン

ケートの信頼性を高め、実態調査に正確を期した。このような過程を経て調査が行われたことにより、都内成人勤務者の歯科保健についての実態をかなりの程度把握できたと思われる。

調査方法

第1回目の調査(以下F調査と略す)では、アンケートの対象者は20代~60代の一般事業所勤務の成人607名(男415名、女192名)、および第2回目の調査(以下S調査と略す)では、現在歯科診療所に主として一般歯科診療を目的にして通院中の20代~60代の成人223名(男129名、女94名)の計830名であった。なお調査課題により、F調査のみ、S調査のみ、およびF調査とS調査の総計(以下F+S調査と略す)を検討の対象とした。

調査項目の概要は表1に示す通りである。

*本論文の要旨は、第241回東京歯科大学学会(平成2年10月11日、千葉)及び第243回東京歯科大学学会(平成3年6月8日、千葉)において発表した。

表1 調査項目の概要

1. 口腔の衛生状態(疾患の状態)
1) 歯の痛みの状態と種類
2) 歯肉に異常を持つ人の頻度と異常の種類
3) 歯の咬み合わせと顎の状態
4) 歯並びの異常とその種類
5) 気になる口の中の異常とその頻度
2. 受療状況
6) 患者の記憶している歯の喪失原因
7) 残存歯数についての意識
8) 充填物の種類とその頻度
9) 歯冠補綴物の種類とその頻度
10) 義歯の種類
11) 義歯の使用状況と具合の悪い理由
12) かかりつけの歯科診療所の種類
13) 歯科診療を受けた時期
14) 歯石除去の経験の有無と定期再来の状況
3. 歯科保健行動
15) 1日のブラッシングの回数
16) ブラッシングの時期
17) ブラッシングの所要時間
18) 歯磨剤使用の有無
19) ブラッシング器具の種類
20) ブラッシング法の種類
21) ブラッシング指導を受けた場所
22) 定期歯科検診の有無と年間回数
23) 定期再来の受け入れ診療所
4. 歯科衛生教育への参加の意思
24) 歯科衛生教育の主催者の種類
25) 歯の衛生知識の媒体
26) 衛生教育における受講希望テーマ
27) 食事時間
28) 間食の1日当りの回数

結果と考察

アンケートの回収状況は、F調査では総数1000人中、回答者607名(60.7%)、無回答者393名(39.3%)であった。

年齢別には、20代の回答者は全回答者中男性70名、女性132名の計202名(33%)、30代は男性106名、女性33名の計139名(23%)、40代は男性108名、女性16名の計124名(20%)、50代は男性123名、女性10名の計133名(22%)、60代は男性6名、女性1名の計7名(1%)であった。

S調査の回答者総数は223名で年代別には20代は全回答者中男性31名、女性53名の計84名(38%)、30代は男性19名、女性13名の計32名(14%)、40代は男性30名、女性11名の計41名(18%)、50代は男性37名、女性14名の計51名(23%)、60代は男性12名、女性3名の計15名(7%)であった。

1. 口腔の衛生状態(疾患の状態)

1) 歯の痛みの状態と種類

歯牙の疼痛を感じたことのある者はF調査で383名(59%)、S調査で239名(83%)であった。(以下例えばF調査で10名であればF10名と表記する)痛みの種類とその頻度は自発痛がF66名(17%) / S74名(31%)、咬合時痛F47名(12%) / S37名(15%)、冷水痛ないし冷感覚痛F252名(66%) / S109名(46%)、温水痛F18名(5%) / S19名(8%)であった(図1)。S調査では歯の痛みや歯周疾患の治療を希望して来院した患者を対象としているため、自発痛の経験率が比較的多くなっている。このことは痛みが来院の動機となることが多いことを現している。なお各種不快症状の頻度は、F、S調査共多い順より冷水痛ないし冷感覚痛、自発痛、咬合時痛、温水痛であった。

2) 歯肉に異常を持つ人の頻度と異常の種類

歯肉に異常を感じている者は、F278名(47%) / S161名(64%)、感じていない者はF318名(53%) / S92名(36%)で、その内歯肉の発赤はF27名(10%) / 17名(11%)、腫脹はF51名(18%) / S44名(27%)、出血はF130名(47%) / S58名(36%)、動揺はF70名(25%) / S42名(26%)であり(図2)、調査対象中約半数の者が自覚していた。これらを年代別に見ると、発赤は20代でF5名(10%) / S6名(17%)、30代でF12名(17%) / S4名(13%)、40代でF5名(7%) / S3名(9%)、50代でF5名(6%) / S3名(6%)、60代でF0名(0%) / S1名(7%)であった。腫脹は20代でF10名(20%) / S10名(28%)、30代でF18名(25%) / S10名(32%)、40代でF9名(13%) / S8名(24%)、50代でF13名(15%) / S13名(28%)、60代でF1名(25%) / S3名(21%)であった。出血は20代でF30名(59%) / S16名(44%)、30代で

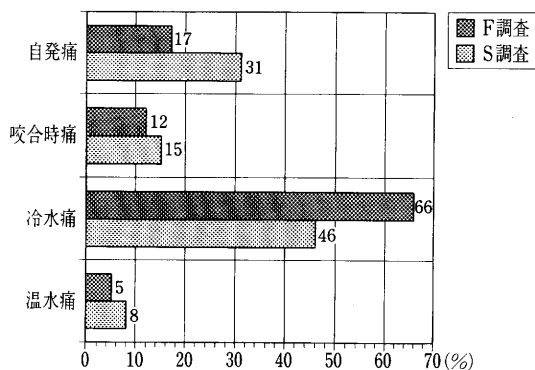


図1 疼痛の経験

F 34名(47%) / S 12名(39%), 40代でF 37名(55%) / S 14名(43%), 50代でF 27名(32%) / S 12名(26%), 60代でF 2名(50%) / S 4名(29%)であった。動揺は20代でF 6名(12%) / S 4名(11%), 30代でF 8名(11%) / S 5名(16%), 40代でF 16名(24%) / S 8名(24%), 50代でF 39名(46%) / S 19名(40%), 60代でF 1名(25%) / S 6名(43%)であった。

3) 歯の咬み合わせと顎の状態

F + S 調査で咬合や顎関節の状態に特に異常を感じている者は180名(30%)。特に関節雑音や開口障害・開口時の筋の疼痛などいわゆる顎関節症様症状を訴えたものは70名(12%)で、その内関節雑音のみ訴えた者は58名(83%), 開口時痛のみ訴えた者2名(3%), 開口障害のみ訴えた者は2名(3%), 関節雑音と開口時痛を訴えた者は1名(1%), 関節雑音と開口障害を訴えた者は2名(3%), 開口時痛と開口障害を訴えた者は1名(1%), 関節雑音と開口時痛と開口障害の全てを訴えた者は1名(1%)であった。全体的にみるとこの種の症状は若い年代層に多発していたが、症状の著しい者は壮年層に多い傾向がうかがわれた。またこの種の症状を有する者は、症状の著しいもの以外は治療の対象となっていないが、歯科疾患の中でも潜在的疾患であると思われ、改めて顎関節症様症状に対する分析や対策が必要なことを示唆している。

4) 歯並びの異常とその種類

F 調査では正常な歯列の回答が363名(62%)で、その他219名(38%)の者が歯列不正を訴えた。その種類としては、前歯が接触しない(開咬など)39名(18%), 上顎前突27名(12%), 下顎前突15名(7%)であった(図3)。これらを男女で比較すると開咬は男性26名(17%), 女性13名(19%), 上顎前突は男性19名(13%), 女性8名(12%)

名), 下顎前突は男性12名(8%), 女性3名(4%)であった。なお、前歯が接触しないという回答はオーバージェットが大きいという意味と開咬の双方を意味していることが考えられた。

5) 気になる口腔内の異常とその頻度

その他の口腔内における関心事項としてF + S 調査では、口臭が気になる156名(27%), 歯肉の変色39名(7%)で、この中にはメラニン色素沈着の者、また不良修復物によるものも含まれていた。歯の色が気になると答えた者は195名(33%)で、この中には歯牙の変色を気にしている者と修復物の変色あるいは修復物辺縁部の褐線形成等を気にしている者がある。歯牙の破折が気になる145名(25%), 歯牙表面の粗造感49名(8%)であった(図4)。

2. 受療状況

6) 患者の認識している歯の喪失原因

なんらかの原因で歯を喪失した者はF + S 調査では660名(80%)で、それらを原因別に考えると図5に示す

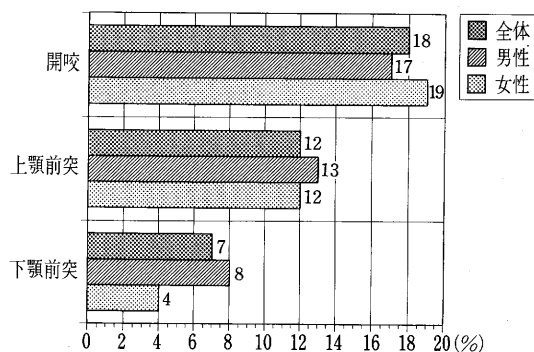


図3 歯並びの状態(F調査)

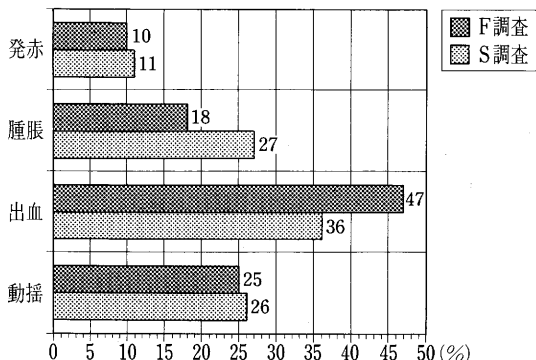


図2 歯肉の異常

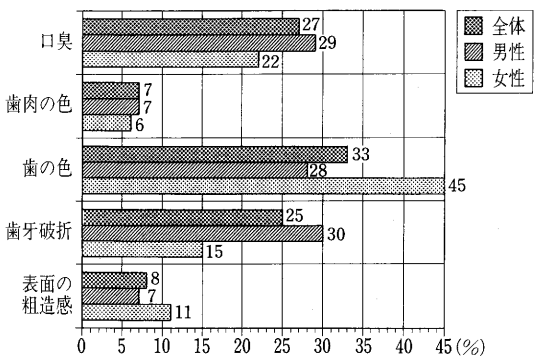


図4 気になる口の中の異常(F+S調査)

とおり齲蝕で抜歯した者462名(70%), いわゆる歯周疾患で抜歯した者58名(9%), 歯の打撲で抜歯または喪失した者42名(6%), 矯正治療のために抜歯した者79名(12%)であった(図5)。

これらを年代別に見ると齲蝕が原因は20代で123名(75%), 30代で109名(73%), 40代で102名(75%), 50代で110名(61%), 60代で27名(63%), 歯周疾患が原因は20代で1名(0.6%), 30代で4名(3%), 40代で5名(4%), 50代で41名(23%), 60代で7名(26%), 歯の打撲で抜歯は20代で11名(7%), 30代で11名(7%), 40代で9名(7%), 50代で10名(6%), 60代で1名(4%), 矯正治療上は20代で19名(12%), 30代で23名(15%), 40代で14名(10%), 50代で20名(11%), 60代で2名(7%)であった。

7) 残存歯数についての意識

S調査では現在残っている歯の本数が全部と回答した者は46名(22%), 上下合わせて24本以上は70名(34%), 21本以上は35名(17%), 20本以下は55名(27%), 全部の歯を喪失した者は皆無であった。

F調査では患者側の自己申告のみで口腔診査を伴わなかったが, S調査では担当歯科医師による確認を行ったため, 多くの者が残存歯数の算定を誤認していることが判明した。すなわち正確な残存歯数を申告した者は157名(70%)であり, 一方何らかの理由で間違っていた者は66名(30%)であった。その内訳は, 実際より多めに考えていた者が6名(5%), 実際より少なめに考えていた者が43名(33%), 歯の数に関心を持っていない者が17名(13%)であった。

8) 修復物の種類とその頻度

F + S調査では, 白歯部の金属修復は全回答者中543名(54%), 次いで前歯部の歯冠色修復は242名(24%),

白歯部の歯冠色修復は124名(12%), 前歯部の金属色修復は61名(7%), 処置した事の無い者が28名(3%)であった(図6)。

これらを年代別にみると, 白歯部の金属色修復は20代で209名(57%), 30代で120名(57%), 40代で116名(68%), 50代で88名(48%), 60代で10名(50%)あった。前歯部の歯冠色修復は20代で98名(27%), 30代で59名(28%), 40代で38名(22%), 50代で41名(22%), 60代で6名(30%)あった。白歯部の歯冠色修復をした者は20代で49名(13%), 30代で24名(11%), 40代で20名(10%), 50代で30名(16%), 60代で1名(5%)あった。前歯部の金属色修復は20代で11名(3%), 30代で8名(4%), 40代で14名(8%), 50代で25名(14%), 60代で3名(15%)であった。すなわち白歯部の修復には各年代共に全調査対象者中金属色の修復物を用いた症例数が半数前後見られ, 歯冠色の修復は10%~15%であった。審美的意識の向上によって前歯には歯冠色の修復を行った者が各年代共20%~27%ずつみられ, 金属色の修復を行った者は比較的少なかった。但し50代以上ではそれより低い年代よりも多い傾向を示し, 増齢とともに前歯に金属色の修復を行った者が多くなっていることが判明した。

9) 歯冠補綴物の種類とその頻度

F + S調査では白歯部の金属色補綴物は478名(60%), 前歯部の歯冠色補綴は100名(12%), 白歯部の歯冠色補綴は61名(8%), 前歯部の金属色補綴は33名(4%), 経験の無い者が129名(16%)であった(図7)。

これらを年齢別にみると, 白歯部の金属色補綴物は20代で147名(78%), 30代で113名(71%), 40代で106名(73%), 50代で97名(65%), 60代で15名(56%)であった。前歯部の歯冠色補綴物は20代で22名(12%), 30代で26名(16%), 40代で23名(16%), 50代で33名(22%), 60代で

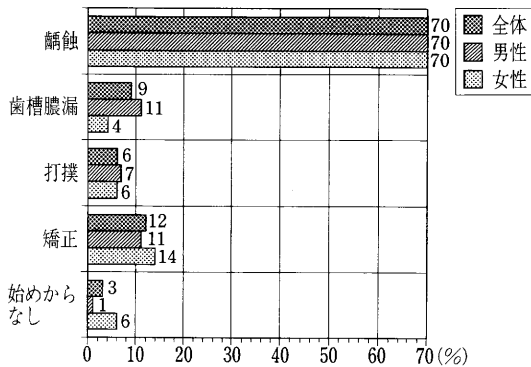


図5 歯の喪失原因(F + S調査)

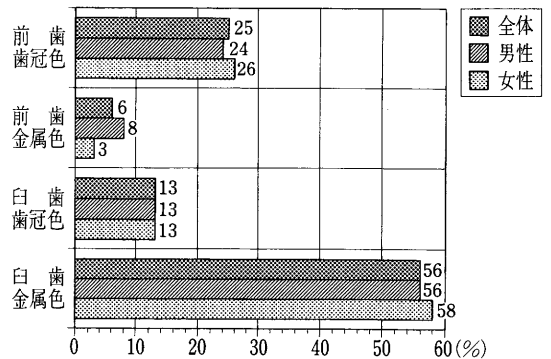


図6 充填物の種類(F + S調査)

6名(22%)であった。臼歯部の歯冠色補綴物は20代で15名(8%), 30代で15名(9%), 40代で11名(8%), 50代で17名(11%), 60代で3名(11%)であった。前歯部の金属色補綴物は20代で5名(3%), 30代で6名(4%), 40代で6名(4%), 50代で13名(9%), 60代で3名(11%)であった。この場合にも前歯部に金属色補綴物を装着した者の数は極めて少ないが、増齢とともに増加する傾向にあった。

10) 義歯の種類

F調査に於いて歯列欠損部に架工義歯を装着した者は117名(48%), 可撤式の義歯は39名(16%), インプラント義歯は26名(11%), 製作(通院)中の者が13名(5%), そのまま放置している者が51名(21%)で、これらを年齢別にみると、架工義歯は20代で(10%), 30代で(18%), 40代で(27%), 50代で(27%), 60代で(33%)であった。可撤式義歯は20代で(0%), 30代で(4%), 40代で(7%), 50代で(13%), 60代で(50%)であった。インプラント義歯は20代で(0%), 30代で(6%), 40代で(4%), 50代で(7%), 60代で(0%)であった。インプラント義歯を装着している者は、比較的少数であった。欠損を放置した者が20代で(6%), 30代で(10%), 40代で(12%), 50代で(8%), 60代で(0%)であった。

11) 義歯の使用状況と具合の悪い頻度

義歯の使用状況としては、常時使用している者が51名(64%)で、時々使用している者が5名(6%), 具合が悪いので使用していない者が13名(16%), 壊れたので使用していない者が4名(5%), 紛失のため使用していない者が7名(9%)であった。可撤式義歯を装着した感想として、便利で具合の良いと思う37名(47%), 良く噛めないと思う15名(19%), 食べ物の味が判らないと思う6名(8%), 口の中に傷ができ易いと思う10名(13%), 取り

外しが面倒であると思う11名(14%)であった。可撤式義歯に歯に関しては、約半数の者が不満に思っていることが判った。

12) かかりつけの歯科診療所の種類

かかりつけの歯科診療所がある者はF 397名(75%), S 203名(91%)で、無い者はF 129名(25%), S 19名(9%)であった。その内訳は個人開業医がF 274名(69%), S 10名(5%), 会社・組合の診療所がF 97名(24%), S 149名(73%), 一般病院の歯科外来がF 20名(5%), S 2名(1%), 歯科大学病院がF 6名(2%), S 42名(21%)であった(図8)。

13) 歯科診療を受けた時期

F調査では治療中の者は67名(12%), 1~6ヶ月前に治療した者は95名(17%), 7ヶ月~1年前に治療した者は120名(21%), 2~3年前の治療した者は123名(22%), 3年以上前に治療した者は154名(28%)であった。

14) 歯石除去の経験の有無と定期再来の状況

今までに歯石除去を受けた経験の有る者はF 438名(78%), S 195名(88%), 無い者はF 124名(22%), S 27名(12%)であった。リコールの状況としては定期的に年1回受けている者がF 28名(6%), S 33名(17%), 年2回または2回以上の者はF 12名(3%), S 8名(4%), 不定期の者F 122名(28%), S 66名(34%), 歯科医院で治療の際に受けた者F 276名(63%), S 88名(45%)であった(図9)。

3. 歯科保健行動

F+S調査において1日に歯を磨く回数は2回が391名(49%)で最も多く、ついで1回が206名(26%), 3回が162名(20%), 4回以上が25名(3%), 磨かない日が有る者が20名(2%)であった(図10)。磨く時間は1日あたり1~2分が389名(49%), 3分ぐらいが200名(24

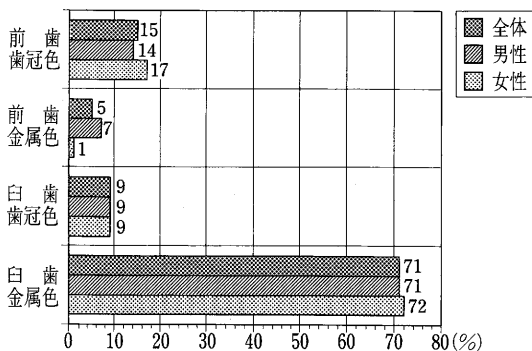


図7 補綴物の種類 (F+S調査)

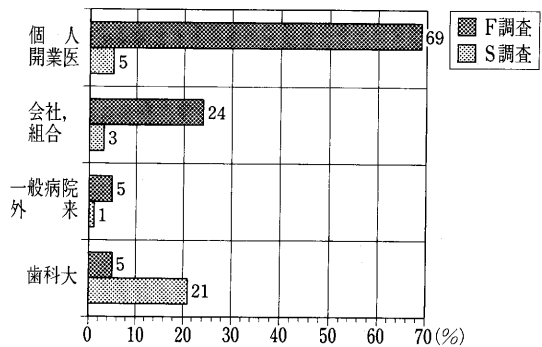


図8 かかりつけの歯科診療所

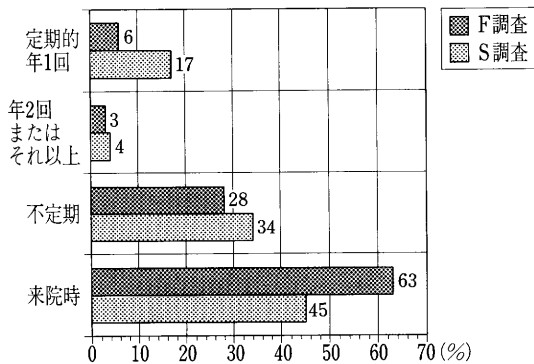


図9 除石を受ける割合

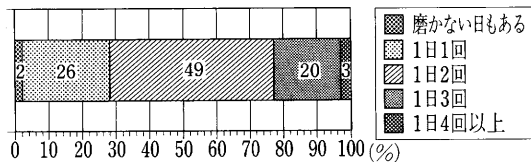


図10 歯磨きの回数(F + S調査)

%), 3分以上が85名(10%), 10~30秒が65名(8%), 特に意識していない者が86名(10%)であった(図11)。磨く時期は朝食後が450名(27%), 朝食前が331名(20%), 昼食後203名(12%), 夕食後が188名(11%), 入浴時または就寝時前が476名(29%)であった。使用する歯磨剤としては, ペースト状が762名(94%)と大半を占め, 粉状の物23名(3%), 水歯磨剤(液状歯磨), 塩はそれぞれ15名(1%)ずつであった(図12)。歯磨きの道具としては, 歯ブラシが圧倒的に多く, 811名(89%)であった。その他, 歯間ブラシ58名(6%), デンタルフロス38名(4%), 電動歯ブラシ13名(1%), 水流洗口器4名(0%)であった(図13)。

歯ブラシを用いた歯磨きの方法としては, 縦磨きが最も多く363名(31%), ついで横磨き257名(22%), ローリング法181名(16%), パス法159名(14%), 特に決めていない者が195名(17%)であった(図14)。

歯磨きの指導を受けたことのある者は, F 310名(51%) / S 179名(80%)であった(図15)。年代別にみると20代でF 80名(36%) / S 69名(82%), 30代でF 78名(56%) / S 25名(78%), 40代でF 65名(52%) / S 31名(76%), 50代でF 84名(63%) / S 42名(82%), 60代でF 3名(43%) / S 12名(80%)であった。各年齢層ともS調査では約80%の率で刷掃指導が行われている。指導を受けた場所は, 開業医がF 174名(56%) / S 19名(11%), 会社・組合の歯科診療所がF 100名(32%) / S 119名(66

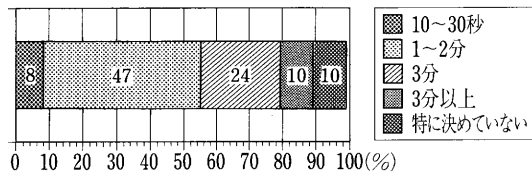


図11 歯磨きの時間(F + S調査)

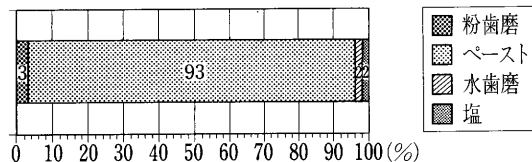


図12 歯磨きの種類(F + S調査)

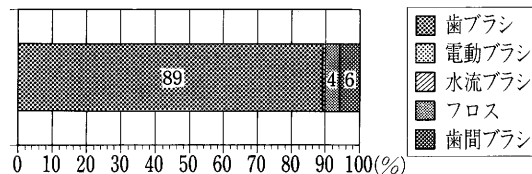


図13 歯磨きの道具(F + S調査)

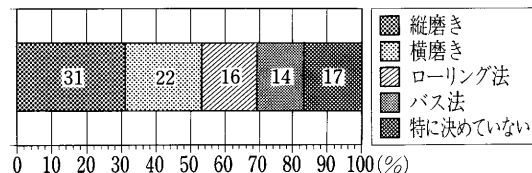


図14 歯磨きの方法(F + S調査)

%), 一般病院の歯科外来または歯科大学病院がF 30名(10%) / S 38名(21%), 地区歯科保健センターがF 5名(2%) / S 1名(1%), 保健所がF 0名(0%) / S 2名(1%)であった。

4. 歯科衛生教育・保健指導への参加希望の意思

歯や口腔の疾患や予防法などについての講習に関心のある者はF + S調査では419名(59%), 関心の無い者が286名(41%)であった。

関心のある者について, 希望する受講方法は, 自治体主催の講演会が6名(1%), 保健所または地区歯科保健センター主催の講演会が27名(6%), 会社・組合などが主催する講演会が164名(39%), かかりつけの歯科医院または診療所, 病院が222名(53%)であった。歯や口腔についての知識の情報源は, テレビ・ラジオが189名(19%), 書物・雑誌・新聞が236名(23%), 家族・知人・友人が126名(12%), 歯科医師・歯科衛生士が343名(34

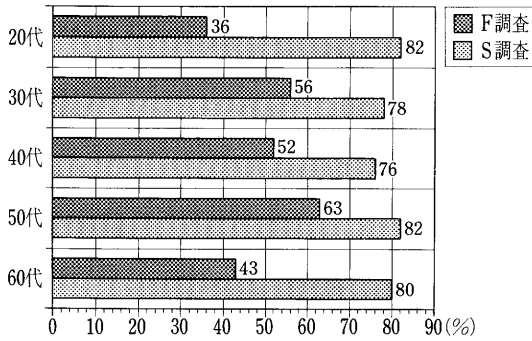


図15 歯磨きの指導を受けた者

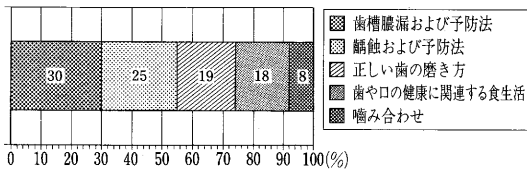


図16 関心のある講習内容(F + S調査)

%)、学校が119名(12%)であった。

関心のある内容としては、歯周疾患及びその予防法が350名(30%)、齲蝕及びその予防法が291名(25%)、正しい歯の磨き方227名(19%)、歯や口の健康に関連する食生活についてが212名(18%)、歯並び・噛み合わせ・顎関節症が96名(8%)であった(図16)。

なお食習慣を知るための調査では1回の摂食時間が、朝食では5-10分が340名(48%)、10-20分が239名(34%)、5分以内が148名(21%)、約30分が33名(5%)、30分以上が9名(1%)であった。昼食では10-20分が407名(51%)、5-10分が220名(28%)、約30分が126名(16%)、5分以内が20名(3%)、30分以上が24名(3%)であった。

夕食では約30分が309名(39%)、10-20分が250名(31%)、30分以上が175名(22%)、60分以上が39名(5%)、5-10分が21名(3%)であった。

間食をする者は667名(82%)である。その内毎日の者が

86名(11%)、1日1回の者は101名(12%)、1日2回以上の者は48名(6%)、時々する者は432名(53%)であった。

ま と め

都内23区内の企業に勤務する成人について、大企業2社、中企業1社、小企業2社に対して行ったアンケート調査によって成人の歯科的健康状態及び歯科保健行動の傾向を知ることができた。歯科衛生教育については約60%が関心があると回答された。関心の主体は歯周疾患、齲蝕、ブラッシング法に関する課題が相当数を占めた。歯の痛みについては調査対象の約60%以上が経験し、これを契機として治療を受ける者が多く、歯肉については出血を伴う状態になって異常を意識することが多い傾向を知ることができた。また顎関節症様症状を訴えた者は12%もであった。

歯列の異常は約4割の者が感じていた。

前歯部の歯冠色修復は金属色修復の約3倍実施されていた。臼歯部の歯冠色修復や歯冠色補綴は金属色修復の1/4~1/7.5倍実施されていた。なお口腔の管理・治療は比較的多数の者に実施されていたが、必ずしも定期的かつ着実に行われているとは言えないと思われた。

謝 辞

本研究の遂行に当たり、平成元年度、および2年度における東京都衛生局の後援に対し深謝する次第です。

参 考 文 献

- 1) 杉山利子, 青木 聡, 市野亮治, 黒田裕之, 高瀬保晶, 細川伊平, 平井義人, 石川達也(1990): 歯科保健に対する成人に意識調査—都心部勤務者の場合—, 歯科学報, 90, 1441.
- 2) 杉山利子, 藤原江里子, 青木 聡, 市野亮治, 高瀬保晶, 野呂明夫, 細川伊平, 槇石武美, 石川達也(1991): 成人の歯科保健実態調査—東京都心部通院者の場合—, 歯科学報, 91, 789.

Toshiko SUGIYAMA, Eriko TAKAHASHI, Satoshi AOKI, Ryoji ICHINO, Hiroyuki KURODA, Yasuaki TAKASE, Akio NORO, Ihei HOSOKAWA, Takemi MAKIISHI, Yoshito HIRAI and Tatsuya ISHIKAWA : **Survey of Awareness of Dental-health Conditions—among office workers in the Tokyo metropolis—**, *Shikwa Gakuho*, 93 : 553~560, 1993.

(The Third Department of Conservative Dentistry, Tokyo Dental College, Chiba 261, Japan)

Key words : *Questionnaire survey—Dentalhealth conditions—Office worker—Statistics—Tokyo metropolis.*

At the request of the Bureau of Health, in the Tokyo metropolis our department conducted a survey on current adult dentalhealth conditions in order to provide information to serve as reference in the formulation of future dentalhealth policies. The survey was conducted in two parts. The first, in 1989, investigated dental problems and dentalhealth conditions from the patient's viewpoint. On this occasion, questionnaires were sent to adults (from 20 to 60 years of age) working in ordinary offices (5 large, medium, and small companies in 23 wards of the city of Tokyo). To enhance the credibility of data obtained in the first survey further, a second part was carried out in almost the same manner as the first, in 1991. This time, questionnaires were distributed among adults (from 20 to 60 years of age) undergoing treatment either at the Suidobashi Hospital of the Tokyo Dental College or at 3 company clinics. After the survey, dentists in charge enhanced the reliability of the results by entering their own comments and correcting respondents' misunderstandings and errors. Data obtained in these ways provide an understanding of dentalhealth conditions and related adult behavior in the Tokyo metropolis.

Results of the surveys indicate that about 60% of respondents are interested in obtaining knowledge about dental matters, whereas about 40% are indifferent. A considerable number of respondents demonstrated interest mainly in such topics as pyorrhes, dental caries, and dentalhealth education. Although 11% of the respondents were actually suffering from temporomandibular arthrosis-like symptoms, only about 8% were interested in that condition or in tooth alignment. In contrast, interest in pyorrhea was higher than its prevalence.

Restorations of anterior teeth employing tooth-crown color were almost 3 times as numerous as metallic restorations. Restoration and prosthesis of molars in natural tooth colors had been performed by 13.3-25% as frequently as molar restorations in metal. A relatively large number of respondents had undergone oral management and treatment formerly, though not always either regularly or consistently.